

審査論文の要旨

本論文は、中国魏晋南北朝時代の墓に副葬される出行儀仗俑、具体的には墓主の出行に用いる車や馬の模型や、従者を象ったとされる俑の形態、製作技法、分布などに対する分析にもとづいて、古墳に副葬された俑や模型の変遷や、それらの生産体制を明らかにするとともに、壁画や画像磚などといったほかの図像資料や文献史料との比較を通じて、当該期の貴人の行列である鹵簿制度の実態に迫ろうとした論文である。当該期の墳墓を特徴づける出行儀仗俑については、これまで考古学だけでなく美術史や文献史学からも研究が進められてきたが、俑と車や馬の模型の研究が、それぞれ別個に進められ、三者が総体として何を表象しているのかについては、十分な議論がなされてこなかった。丹念な資料集成と考古学的分析にもとづき、当該期の俑や模型の変遷の大綱を明らかにし、その成果にもとづいて個別の俑や模型が意味するところについて議論を展開した点は、この論文の最大の特徴である。また様々な史資料とあわせて検討することによって個々の俑と車や馬の模型を出行儀仗俑や明器鹵簿として捉え直し、それらが当時の文化・制度の復元をする有効な手がかりであることを明らかにした点も、大きな達成として評価できる。

本論文は大きく4つの章からなり、それに序章と終章、補論を付加した構成をとる。第3章は査読誌に掲載済みの論文であり、第1章は査読紙に受理済みの論文、他の2章と補論はそれぞれ現在投稿中の論文である。

まず第1章は「魏晋南北朝時代の「馬俑」について」とし、魏晋南北朝時代の出行儀仗俑の中核に位置しながらも、鹵簿制に関する史料の中に明確な規定がみられず、これまで体系的な検討がおこなわれてこなかった騎乗用馬模型について、中国全土で180例の出土事例を集成した上で、時期的・地域的特徴を明らかにするとともに、それらにあらわされた馬装について分析をおこなった。その結果、鞍や鐙や馬甲など実際の騎乗に関わる要素については当時の馬具の実態に即して変化が認められるものの、馬の額を飾る前髪や胸繫・尻繫の装飾など馬装における威儀や身分の表象にかかわる要素の中には、漢代の駕馬（馬車を牽引する馬）に系譜を辿れるものがあり、西晋代に定型化され、北朝に至るまで基本的に継承されていくことを明らかにした。文献史料や実物馬具が零細で、よくわかっていないことが多い当該期の騎馬について、馬模型や騎馬俑の馬装表現に対する緻密な観察を通じて漢代の駕馬との共通性を見出し、飾馬における西晋様式の存在を浮かび上がらせたことは本章の大きな成果である。

次の第2章は「椅子式牛車についての一考察」とし、高句麗壁画墓に描かれた出行行列図において主車として描かれている椅子形の車に着目し、それを象った車模型を集成し、西晋から東晋にかけては辺境でのみ確認された椅子形の車が、北魏においては都の貴族墓にも副葬されるようになり、北齊にいたっては皇帝の乗輿として用いられるまでに汎用性を高めたことを明らかにした。また高句麗壁画墓において、主車の前に騎乗者のない鞍馬が描かれていることに注目し、それが主車に乗っていた主人のまたがる主騎であることを指摘し、車模型や俑とともに副葬された騎乗者のない馬模型も同じような意味をもっていたこと、隋代の「馬珂」条と対応するような、騎乗者の身分に対応した騎馬の装飾規定が当該期にも存在した可能性を提起した。古墳壁画と墳墓副葬出行儀仗俑を合わせて検討す

ることで、騎乗用馬具を装備しながらも騎乗者のない馬模型は墓主の乗り物であり、騎馬俑は従騎に過ぎないことを論証した点は本章の大きな達成といえるだろう。

第3章は「持物孔からみた北朝陶俑の展開」とし、出行儀仗俑が盛行する北朝期においてその中核をなす人形の俑について悉皆的な集成をおこなった上で、俑に設けられた持物固定用の挿入孔（持物孔）にもとづいた新たな分類案を示し、壁画資料との対比により有機物製であるために失われてしまった持物の推定が可能であること、北魏晩期や北齊・北周期にみられる持物孔の設け方の変化が大量生産などを背景とする製作の簡便化と対応していることなどを論じる。製作技法や製作工程が変化しても、持物孔の基本的なあり方は北魏代から東魏・北齊へ受け継がれており、持物のみならずそれらをもった俑の集合体である隊列の編成自体が王朝を越えて受け継がれているという指摘や、北周や隋唐には北齊俑の持物孔のあり方は受け継がれなかったものの、造形的志向（様式）については継承されたという指摘は、隋唐代へと続く出行儀仗俑の意味を考える上で重要である。

第4章は「奏樂騎馬俑と十六国・北朝の鼓吹樂」とし、魏晉南北朝時代の奏樂騎馬俑に着目して、文献史料が乏しくこれまでほとんど研究が進んでいなかった当該期の鹵簿の中での鼓吹樂や、その背景にある樂制についてアプローチする。具体的には確実に樂器をもつ俑の手のポーズを基準に据え、持物の明確でない俑の中から奏樂騎馬俑を抽出し、元来もっていた樂器を推測するところから論を始め、奏樂騎馬俑の変遷を確認した上で、十六国期の出行儀仗俑に胡服と胡帽をまとう奏樂騎馬俑が出現し、北魏末期に漢式服と結びついた新たな樂器をもつ奏樂騎馬俑が加わり、東魏・北齊と西魏・北周のそれぞれへ継承されることを論じている。続く補論「雲岡石窟にあらわされた樂器について」は俑や模型を扱うものではないが、同時期の北魏の大規模仏教遺跡である雲岡石窟にあらわされた樂器の種類と彫られた時期について検討している。480年代の雲岡石窟に中国固有の樂器である琴瑟系樂器や阮咸・長簫といった、漢代以来の樂器が出現することに注目し、資料にみえる北魏太武帝の樂制改革の影響が仏教儀式にまで及んだことを論じている。当該期の樂制に関する文献史料は零細で、考古学的研究もほとんどなく、俑と石窟という異なる圖像資料を同一の方法論で扱った第4章と補論によって、当該期の樂制研究に新たな道を切り拓いたといえよう。

以上のように本論文は、魏晉南北朝時代の出行儀仗俑を構成する俑や馬・車の模型に対する緻密な検討からそれらの基本的な変遷や地域性を明らかにするとともに、文献史料や壁画資料等のほかの圖像資料との比較を通じて、当該期に盛行した副葬出行儀仗俑が単なる明器ではなく、実際の制度や文化を反映していることを論証することに成功している。個別の俑・模型に対する具体的な検討に留まり、出行儀仗俑を組成や出土状況から群として捉え直し、それを文献史料にみられる鹵簿制度と対比する手続きが十分になされていない点は今後に残された大きな課題ではあるが、文献史料の豊富な秦漢代と隋唐代の間位置しながら、文献史料が乏しいがゆえにその実態が明らかでなかった、当該期の礼制や樂制に対して考古学から新たなアプローチを試みており、獨創性の高い研究として評価できる。